

昭和 37 年度
(1962)

積雪期母池—鹿島槍ヶ岳極地法登山

昭和 38 (1963) 年 3 月 9 日～3 月 30 日

この合宿は、我々山岳部として、将来のヒマラヤ登山を想定した極地法登山を経験しようとして、企画されたものであった。詳細な記録が残されているので、ここでは、報告書より主たるところを抜粋して、その合宿の概要をとりあげた。母池に BC を置き、大池に C1、白馬村営小屋に C2、天狗岳に C3、唐松岳に C4、五竜岳に C5 を置く、全長 23Km の長大合宿であった。重量軽減のため、BC 以外はすべて雪洞を使ったユニークな合宿でもあった。この合宿以降、部は分散形式の合宿を取り入れるようになって、個人の自主性を重んじる山行に、舵を切ってきたように思う。その意味では、重要な転換期の合宿であった。

とにかく、我々は 22 日間、あの白き後立山連峰で、自然の素晴らしさとそして厳しさを、自分なりに大いに吸収した。そして、極地法による山行というものが如何なるものであるかということ、グッと身近に感じ、それによる今後の部の方針というものが、自然と生まれよう。

多人数、多日数を費やしての、膨大な山行も、この合宿で峠を越すことになろう。そして、一人ひとりをもっと実働的に意義のある山行を持ち込むよう働こう。

38 年度は、分散を主とした合宿に移り変わったことも、また当然の部の流れであろう。ポッカに終始した合宿に限りない喜びを見出した心を忘れずに、今後の部の活動に意欲的に当たってもらいたい。

この春山合宿は、実に皆頑張った。と、総てが完全になされたわけでもない。まだ多くの問題が残されている。しかし、あの皆が一丸となって頑張った心を忘れないかぎり、この合宿が、部発展の一里塚となって、より高きに到達されよう。

CL 出島 五郎

参加メンバー

CL 出島五郎 SL 小谷雅宣

渉外 西郡光昭

食糧 板谷真人 平 邦彦

燃料 真野孝一

装備 川崎 誠 松尾武久

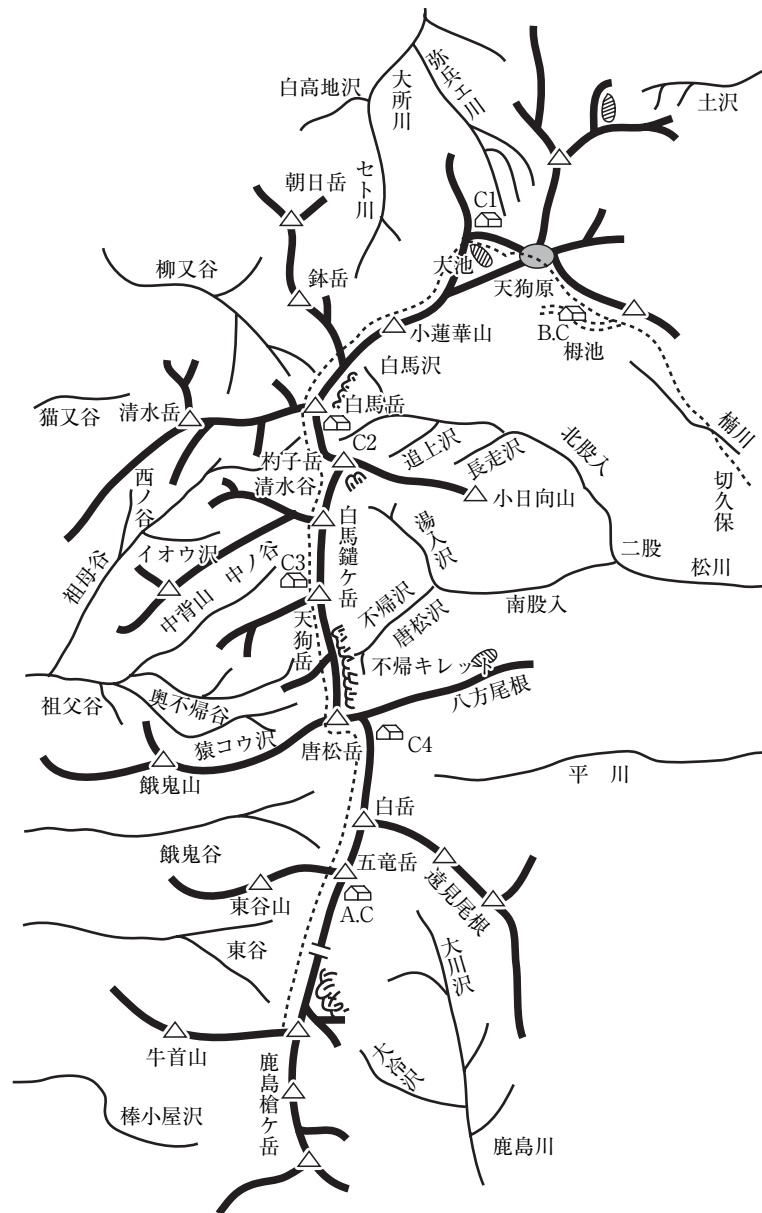
気象 柴田武明

梱包輸送 玉井洋明

会計 後藤紀彦

隊編成

- A隊 アタック隊 西郡光昭 (3) 柴田武明 (2)
- B隊 小谷雅宣 (3) 真野孝一 (2) 平 邦彦 (2)
- C隊 出島五郎 (3) 玉井洋明 (3) 新 幸芙 (3)
- D隊 松尾武久 (2) 板谷真人 (2) 川治晴彦 (2) 山形文武 (1) 西阪 孚 (1)
- E隊 川崎 誠 (3) 石井一哉 (3) 小川 勝 (1) 新谷 剛 (1) 宮崎敏孝 (1)
- F隊 後藤紀彦 (4) 斉田坦男 (5) 駒井 浩 (1) 中邨康文 (1) 松井康彦 (1)
- OB 葛西正美 中村 健顧問教授 赤井竜男教授



後立山概念図



●白馬岳をバックに ABCD 隊

行動概略

3月9日 BC 設営、晴れのち曇り、夕方雪

例によって、寮食堂にて飯を食い、合宿装備をバスに積み込んで、車上の人となる。四谷～切久保間は、小型バスに積み替えて、4人を乗せて、他は歩く。ザックにパッキングされていない荷物一切は、切久保の駒草荘の好意により置かせてもらう。御殿場より10人がスキーを履く。朝方の快晴はもはやなく小雪がチラつきだす。早大小屋よりシュプールなくワカンをつける。全員一体となって拇池入り。16:20

3月10日 C1 建設、終日雪

BCより直接、夏道のある尾根に取り付き、天狗原に出る。祠までくると、拇の林も無く、ビョウビョウたる大雪原である。視界は1Kmに満たず、懸念の乗鞍の登りは凹凸がはっきりせず、見えないながらかすかに膨れている、祠から真西の尾根に取り付く。尾根というにはあまりにも定かでなく、不気味な斜面で、上のわずかなブッシュ

をめがけてまっすぐに登りきる。C1は距離の短縮を考えて、大池の南端を予定していたが、雪崩の危険を感じ、池の北端にまわる。幸い大池小屋（埋まっていて見えず）の東北東50mあたりに風成雪による格好の雪洞地点を見つけてC1とする。

3月11日 白馬偵察、晴れ

無風快晴、サブザックで今日は予定通り白馬までのルート偵察。天気は良く、荷はなく、皆すごくゴキゲン。小蓮華の稜線は、南に4～5mの雪庇が発達している。まだ崩壊の心配はないが、これからの長い合宿を思うと、十分な注意が必要である。4時の天気図を取るために、白馬直前で引き返す。

日の高いうちに、明日登ってくる、A、D、E隊のため雪洞をもう一つ掘る。

3月14日 C2 建設、晴れ

7:30、稜線に出てから、ワカンを外してアイゼンとする。稜線は気温低く、北風厳しく、今日一日の好天を約束してくれる。思い出多き白馬頂上にもゆっくり出来ず、早々に雪洞地点を目指し

て下る。国境稜線黒部側の雪量は、冬と変わりなく少ない。

雪洞は、村営小屋の南面 50m、信州側の吹き溜まりに二つ掘る。西郡、真野は白馬鑓まで偵察。鑓の登りのナイフリッジ手前にフィックス 30m 設定、要所に標識を立てて帰ってくる。

3月15日 C3建設、曇り

天候は余り芳しくはないが、去りつつある高気圧が 1028mb と大きいので、これから襲う低気圧の影響もまだたいしたことないとの判断で行動に移る。鑓までは、昨日の偵察でかなめの箇所にも標識を立ててあるので、スムーズに行動する。稜線はかなり雪があれど、風のため充分しまっていて、ラッセルに汗を出すこともなく、天狗小屋に着いた。C3 を出来るだけ前進させたいため、西郡、柴田に雪洞地点の偵察に行ってもらおう。幸い天狗岳の西側に雪洞の掘れるところがあるとの報に天狗岳まで足を伸ばす。北アルプスの稜線上の穴掘りは、中央アルプスの如くスムーズにいかず、掘るにしたがい、雪は固くなる一方で、16 時どうにか完成した。

3月18日 不帰偵察、曇りのち晴れ

案じていた天狗の大下りは雪もクラストしておらず、岩ポコが出ている程度で雪崩の心配も無く、夏道どうしに忠実に下る。大下りの底から一峰に向けて夏道をトラバースして 50m も行かないうち、トップの西郡が小さな板状雪崩に流されかかる。ここで夏道を敬遠して、稜線に逃げフィックスを一本張る。

二峰の登りは、まず状況把握とて、一切フィックスせず、すでに張ってある関大のフィックスを使わせてもらい、下りにフィックスしながら下る。二峰北峰下の信州側トラバースは雪が不安定なので、そこは北峰北の肩から稜線よりやや黒部側、旧道にルートを取る。これによりサン橋までは、ほとんど稜線をとおり、サン橋から夏道をとおって一・二の科尔に至る。二峰ではハーケン 20 枚、ザイル 40m 2 本、30m 4 本、8mm40m1 本、カラビナ 20 個を使う。

常に不帰の黒々とした壁に圧倒されていたので、天狗に登りきると、広大な白銀の大斜面は、実に明るく開放的である。

3月19日 C4建設、晴れ

昨日のフィックス地点をさらに拡張すべくフィックス用ザイルを 3 本持つ。一・二峰科尔までは快調なペース。二峰 B 峰で荷を滑車で吊り上げ、慣れないせいかなかなり時間を食う。B 峰ナイフリッジに張った補助ザイルを 12mm に換え、北峰下の台地から北峰までに 15m をさらにフィックス。これより一気に唐松までとばし、牛首の南東面の科尔に雪洞を掘ることにした。

3月20日 アタックキャンプ建設、快晴

大黒岳の下りは、もろい岩でいやだったが、そのあとは、人通りが激しいせいとか、舗装道路を歩いているような感じであった。アタックキャンプは、五竜頂上から 5 分くらいキレットのほうに下った地点で快適なものが掘れた。

17 時、アタックについて交信する。現在、かなりオーバーペースなので隊員の疲労は隠しきれない。計画の順調なときほど、慎重でなければならぬとの意見もあったが、五竜—鹿島間は、連日の好天で最高の状態であるため、現在なら一日で往復できること。この快晴続きを逃すと、大きな気圧の谷が本邦を覆うこと。アタック隊の二人は、アタックできる体調であること。これらにより、この好天をつかんで、明日アタックとする。

多くの仲間が唯一つの目標に向かって、ガッチリと肩を組む姿は美しい。皆の限りなき誠意と意欲と純粹なる熱情を見るにつけ、山行の素晴らしさは、人間として生きることの幸福を我々に知らせてくれるようだ。

3月21日 鹿島槍ヶ岳アタック、曇りのち晴れ、西郡隊員記録

昨夜のうちに整えておいた、アタックの用具をもう一度点検しながらパッキングする。登攀用具、ビバーク用装備、それにアタック隊でなければありつけそうもないアタック食、大きめのサブザックは、たちまち一杯になるが二人とも不平は



●目標の鹿島槍ヶ岳頂上

言わない。

五竜岳の下りはかなり急だ。上半は急な軟雪の斜面、下半は殆ど雪の着いていない岩稜だ。この下りは慎重を期して、夜明けを待って出ることにする。夜が白々と明けて、5時20分愈々出発だ。念を入れて、ヘッドランプをつけて下り始める。凄きもの五竜岳の稜線。アイゼンと岩が火花を散らす。ギャップの多い雪稜に変わる。風は強いが、信州側の雪庇に注意すれば、アイゼンも効いてどんどんピッチが上がる。道標やトレースははっきり残っている。7時30分キレット小屋で、風を避けて休憩。小屋には炊事用具、食糧等が置かれてあるが、人影は見えない。八峰キレットはザイルをフィックスして問題なく、これからは殆ど夏道と同じ。黒部側のトラバースは、表層雪崩に注意して、一息登れば、鹿島槍の本峰であった。柴田と握手したのは9時20分。空はあくまでも青く突き上げて二人の視界を遮るものはなかった。

アタックキャンプに帰るのは、アタックするより辛かった。吊り尾根であまりに長い休息をとったのと、日中は気温が急激に上昇したうえに、風が殆どなくなったせいで、アイゼンは3歩も進まぬうちにダンゴになり、朝ルートをとった雪面は、雪崩の危険を含んで通過できず、太陽は3月のそれとは思えない程激しく照りつけてくる。二人には稜線を忠実に辿るより方法がなかった。

しかし、鹿島の北壁の胸のすくような、スケールの大きさと、中央ルンゼに取り付いている3人パーティーの蟻のような影の小ささとは、二人を慰めてくれるに充分であった。柴田も僕も疲労の色はもはや隠せなかった。帰りの長い道程はあきらめにも似た気持で歩くよりしかたなかった。ただ歩くだけだった。

五竜の登りの苦しかったこと。やっと雪洞に帰れた。3時10分だ。二人とも雪洞のなかにながらぎ込むようにして横になったまま暫くは動かない。とうとう帰った。本当にとうとうだ。アタックに成功して帰ったのだ。成功した喜びを強く感じたのはこのときだった。成功、無事帰着の報をチーフはじめ各キャンプに伝えたあとは、急に緊張がほぐれた。

3月27日 BC集結、曇りのち晴れ

8時すぎに、A、B、C、D隊全員がC2を一度出発するが、強風激しく転倒する者も出たりして、頂上小屋までも行けず、一度引き返す。風のおさまったのを見極めて出発。

C1でE、F隊と合流して、C1を撤収してBCへ下る。BCは一度にテンヤワンヤの大騒ぎ。白馬の大日様も、顔の黒い、雑い連中を渋い顔して見てござった。

3月30日 下山、晴れ

懐かしの梅池BCもこれでお別れ。入山したときよりも大きな荷となっていた。何日かの訓練で自信をつけた人達はスキーを履く。ところが重荷のうえ新雪30cm、スキーに操られて殆どの人が早大小屋あたりまでで、スキーを担ぐ羽目になった。

ワッパの衆も快調で、取り入れ口で長い間ザックの中で眠っていたピンチ食を食べる。皆楽しそ

うだ。人里はもうすぐそこだ。



●下山の日 BC 撤収を終えて



●梅池から白馬三山を望む